

令和3年度 MieMu の活動と運営の外部評価結果（概要）

【評価結果】

- ・ 学芸員の年間の研究成果公表数が、目標（13回）、また、昨年度の実績（24回）を上回る34回であったことは評価できる。しかし、その内訳を見れば、昨年度と同様に職員毎に偏りが大きいことから、解消に向けた原因究明や今後の改善が望まれる。
- ・ 資料データベースの閲覧回数（6,107回）は、昨年度とほぼ同数で、目標（5,000回）を上回った。また、新規データの登録（763件）も昨年度（304件）より増加して着実に進んでおり、継続して進めて欲しい。
- ・ 資料の保全・継承は、目標とした定期点検や清掃は実施できたが、昨年度に引き続き虫害（2件）が発生したことから、評価は「2」とした。うち1件は、昨年度からの経過観察（別置）中であり考慮の余地があるが、他は新たなケースである。総合博物館として多様な資料を扱うが故の困難さもあるが、引き続き点検強化と予防に努めて欲しい。

以上の3戦術から成る戦略1の達成状況は、第三者による評価「3」を踏まえ、当部会では、特に、学芸員が総がかりで、館蔵品や日頃の研究成果を遺憾なく活用した展示（トピック展「学芸員の一押し資料」）の開催が、博物館らしい調査研究成果の発表としておおいに評価できる点からも「3」と判断した。

- ・ 基本展示は、魅力的なトピック展を併設し、リピーターの確保や動画の活用等を通じて、8月後半から9月末までの臨時休館がありながら、コロナ禍での新たな目標（31,000人）を上回ったこと（34,990人）は評価できる。なお、アンケート結果の分析（「昔の道具を考える」展）は、母数にも留意して行う必要がある。
- ・ 企画展示は、「やっぱり石が好き」展では、コロナ禍で会期が3日短縮となった分を割り引いても、目標の観覧者数（23,000人）の約3/4（17,419人）にとどまった。「寺院に伝わる戦国の残像」では、会期を変更して開館日数を確保し、目標（8,500人）を上回る観覧者（10,920人）を得たことは評価できる。企画展示全体としては目標値（32,000人）を下回ったこと（28,875人）から、「2」とした。

以上の展示に関する戦略2は、基本展示・企画展示ともに、過去の実績に基づいて再設定した満足度に関する目標（70%）を達成できたことから「3」とした。なお、指標の分析に当たっては、来館回数だけではなく、年齢層や居住地等の属性を含めたクロスチェックが効果的であり、今後、検討して欲しい。

- ・ 地域への理解を深めてもらうことを目的とした参加型調査とその成果の公表は、昨年度は中止せざるを得なかったが、今年度は動画配信などコロナ禍の

下で安全を確保しながら実施できた。その成果を移動展示として公表し、目標（500人）を上回る参加者（536人）を得ることができたことから、本戦術としては「4」とした。これとは別にパネル展示も開催し、332名の来場者を得たことも評価したい。

- ・地域の魅力を伝えることを目的とした学芸員による出張講座は、目標（1,040人）を大きく上回る利用（37団体1,984人）を得ることができた。団体数・人数ともに昨年度（36団体1,568人）を上回ったこと、利用者の安全確保に留意したオンライン形式で実施できたことも評価できる。

以上の地域への愛着を育むための戦略3は、安全確保に努めるとともに、昨年度の「評価不能」の反省を活かしてデータ収集に努めた結果、戦術6・7での満足度は、ともに目標（75%）を上回ることができた。

- ・ミュージアムパートナーは、コロナ禍の影響で休館期間中に活動を停止せざるを得なかったことや、近隣との合同イベント（M祭）が中止になった中で、目標（利用者1,700人）を超える参加者（利用者1,711人）を得ることができた。また、コロナ禍にあってWEB経由で学芸員ミニ講座を開設したことも評価できる。しかし、昨年度指摘した会員の期待に応えるための具体的な動きが乏しいことや、アンケートの対象が事務局の一部の会員にとどまった点は、改善が求められる。
- ・コーポレーション・デーは、昨年度と同様にコロナ禍の影響を受け、予定していた4団体が中止となり1団体のみの実施となった。開催日の入館者が昨年度（368人）を上回った（778人）とはいえ、年度当初に設定した目標（総計5,000人）を大きく下回ったため、「1」とした。コロナ禍が続く中、相手先の方針・事情もある中で、従来どおりの目標を掲げることは再考を要する。
- ・研究機関等との連携は、企画展での三重大学、速報展での三重県埋蔵文化財センター、交流講演会での岐阜県博物館との連携・協働を通じて、目標（700人）を大幅に上回る利用者（21,933人）を得ることができた。一方で、連携先が固定的であることは否めず、昨年度と同様に今後は、他の県立施設や他大学など新たな組織との連携も積極的に進めることを期待する。

以上の3戦術から成る戦略4の達成状況について、昨年度は「評価不能」であったが、今年度は前提となるデータが、おもに相手先の団体を単位としてではあったが取得できた。その結果、「満足」の割合が、5(ないし6)団体中の3(ないし4)団体にとどまったことから、目標（75%）には届かず「2」とした。連携相手のより詳細な満足度を評価するために、アンケートの対象を拡大すべきではないか。また、コーポレーション・デーで「やや不満」と回答があった原因は、事前の協議・説明が十分でなかったことが予想され、今後、改善が求められる。

- HP や情報誌を通じた県民への情報提供は、昨年度と同様、コロナ禍の下、「MieMu@ほ一む」で目標（4,800回）を超えるアクセス数（5,626回）を、年間を通じてコンスタントに獲得できた。また、定期的に刊行する「みえんしず」（4回刊行）でも、平易な表現に配慮しつつ、タイムリーな情報提供ができた。
- 「調べ方」を学ぶ事業は、学芸員との対面事業を中心に、予定した10事業18回のうち7事業14回を実施し、目標（160人）を大きく上回る参加者（267人）を得ることができた。参加者定員を減らしたり、オンラインを活用するなどの感染症対策を確実に実施する中で、昨年度実績（73人）を上回ったこともおおいに評価できる。

学芸員が知的資源やその活用方法を伝える戦略5は、県内在住者を対象としたアンケートで、目標（「目的の情報が得られた：75%」）には到達できなかった。また、評定が昨年度に引き続き「2」であること、さらに値は昨年度と比較して低下（74%→70%）しており、改めて「目的の情報がより見つけやすい、早く到達できるための工夫」について、原因の分析と改善を求めたい。

- 「こども体験展示室」は、昨年度と同様にコロナ禍の影響を大きく受け、年間92日しか開室できず、しかも、一日あたりの入場回数・組数・人数を制限しての運用となった。とはいえ、年度当初に掲げた目標（60,000人）にはほど遠い（3,381人）ため、「1」と判断せざるを得なかった。適正な評価と改善を実現するため、改めて展示室の運営方針とそれに沿った指標や目標を定めることを求めたい。
- 子どもたちに学習の楽しさを伝える事業は、他の事業と同様にコロナ禍の下、安全確保のため実施や参加人数が限られる中ではあったが、中止を差し引いた目標人数（約930人）には届かなかった（634人）ため「2」とした。昨年度の実績（343人）を上回ったことは評価できるが、必要に応じて、目標値の再設定も検討すべきではないか。
- 学校と連携した課題探究型学習の支援は、8月後半から9月末までの県内高校の休校にもかかわらず、9校を対象に、目標（1,500人）を大幅に上回る数（2,714人）の支援ができたことは、昨年度（2,077人）と比較しても、おおいに評価できる。フォーラムの開催による成果発表の機会が提供できたことも、事業の「仕上げ」として効果的であったと考える。

次世代の育成を目標とした子どもたちの学習機会の充実（戦略6）は、19歳以下を対象としたアンケートを47の事業で実施し、目標（75%）を大きく超える82%に達したことから、「4」と評定した。昨年度（77%）を上回った点でも評価できる。いずれの事業も、「次世代の育成」にとっては極めて重要であることから、引き続き安定した事業実施と成果の確認、改善を期待したい。

- ・ 業務の改善に向けた定期的な進捗管理は、四半期ごとの全体会議を通じて、一定数（7件）の課題の抽出と共有を行い、改善に努めたことは評価できる。ただし、昨年度の外部評価での指摘事項の一部が、進捗管理の対象から漏れていたことは注意を要する。

戦略7は、上記の通り、昨年度の指摘事項がある程度改善されたと判断できる項目とともに、昨年度と同様、あるいは指摘にも拘らず後退した項目が認められるため「2」とした。具体的には、戦術7・12ではコロナ禍での安全確保が継続でき、戦略3・4では評価の前提となるデータの取得ができた。反面、指摘に対して、改善の途上（戦術3）、その取り組みの姿が見えないもの（戦術1・8・10）、数値が悪化したもの（戦略5）も散見される。今後は、前年度の指摘事項も念頭に、戦術16の課題抽出や進捗管理に努めて欲しい。

【提言】

先の評価の結果でも言及したが、戦術9のコーポレーション・デー及び、戦略13の子ども体験展示室について、2年続けて目標値を大きく下回ったことは、コロナ禍の下、相手がある中で単純に館側の責に帰することはできない。目標値は年度当初に設定されたようだが、環境と実績を踏まえて再度、見直す必要がある。その際、今後、個々の事業をどのように位置づけ、進めていくべきかの基本方針を定め、その上で、これらの事業を評価するための指標や目標値を再検討して欲しい。

次に、評価指標について検討を求めたい。その一つは、戦術1で、現在は判断の根拠として「発表論文等」や「著書・編著等」を軸に評価してきた。内部評価結果にもあるように「調査が行えず公表数の少ない学芸員は、企画展開催等を目的として、基礎的な研究活動を継続している」ことや、講演会での発表等も含め、博物館の研究とは何かを踏まえた指標を検討して欲しい。二つ目は戦術10で、その指標を「利用者」＝イベントへの参加者として評価してきた。しかし、事業の成果とも考えられる利用者数に優先して、事業の結果（アウトプット）としては連携事業に関わった人の数という視点が必要ではないかと考える。三つ目は戦略7で、現状では「各事業のコスト・パフォーマンスの改善（定性）」となっているため、厳密には、投入した経費を明らかにし、その額の妥当性を評定すべきである。こうした評価は、プログラム評価においても最上層（第5層）に位置づけられており、単年度（短期）で評価することは適当でない。現行の評価内容を見れば、「評価結果に基づく改善の進捗（定性）」などが妥当と思われる。

以上の指標や目標値については、評価の目的が「改善」や「説明責任を果たす」こと、更にはモチベーションの維持・向上でもあることから、期中であつ

でも再検討は必要である。しかし、安易であったり自己都合による変更は禁物で、妥当な根拠に基づき、必要な手続きを経ることが不可欠である。

最後に、評価の手順について、改めて確認しておく。内部評価では『評価シート』を作成し、「評価理由」、「改善視点」、「指標の分析結果（事実確認）」の視点から分析を行っている。具体例を示せば、評価指標が利用者数の場合、①「指標の分析結果（事実確認）」で収集したデータを分析（全数だけではなく、アンケート等を併用して、利用者の年齢構成・居住地・同伴者・来館回数なども分析）して、実績値を確定する、次に、②実績値と目標値を比較し、必要に応じて実施条件や環境も考慮しつつ、「評価理由」を付して評定を下す。最後に、③目標値以外の要素の分析結果も参考に、実績値となった理由（近隣の来館者が多かった、高齢者に好評であった、初めての来館者が多かった等々）を探り、今後の改善・発展の参考に資する。

しかし、『評価シート』では、戦術・戦略の項目によっては「指標の分析結果」・「評価理由」・「改善視点」を混同し、三者を峻別できていない箇所が散見される。換言すれば、こうした混乱が生じては事業の課題や今後の改善視点を見誤ることになり、評価の目的である改善、さらにはモチベーションの向上も困難となる。改めて、評価が「事実の特定+価値判断」であることを基礎に、三者を峻別した作業を進めることを求めたい。

【まとめ】

当館の評価は、第3期（2020～2023年度までの4カ年）に入った。その2年目の結果を見ると、戦術については、「4」が10項目、「3」が1項目、達成度に難がある「2」は3項目、「1」が2項目である。また、戦略の結果は、「4」が3項目、「3」が1項目、「2」が3項目である。

初年度と比較して、いずれも評価が向上していること、また、初年度は戦略・戦術ともに2項目あった「評価不能」が解消されたことは、ともに改善が進んだ証として評価できる。しかし、戦術において2項目が「1」であったことは、目標値の再設定を含め、検討を要する。また、戦略5と7のいずれもが2年続きで「2」であったことは、特定の項目については依然、改善が進んでいないことを示している。

これらの結果や上記の提言で指摘した評価の手順も参考に、2022年度を含めた今期中にさらなる改善が進むことを期待したい。

別表 評定点の推移 (2020～2023 年度)

戦略	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	戦術	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
戦略 1 (01)(A)	3	3			戦術 1	4	4		
					戦術 2	4	4		
					戦術 3	2	2		
戦略 2 (01)(02)(03) (A)	3	4			戦術 4	3	4		
					戦術 5	3	2		
戦略 3 (03)(A)	-	4			戦術 6	-	4		
					戦術 7	4	4		
戦略 4 (02)(B)	-	2			戦術 8	3	4		
					戦術 9	2	1		
					戦術 10	4	4		
戦略 5 (02)(B)	2	2			戦術 11	4	4		
					戦術 12	2	4		
戦略 6 (02)(B)	3	4			戦術 13	-	1		
					戦術 14	2	2		
					戦術 15	4	4		
戦略 7 (業務改善)	2	2			戦術 16	3	3		
合計	13	21				44	51		
百分比(※)	65%	75%				79%	80%		
「4」の個数	0	3				6	10		
「3」の個数	3	1				4	1		
「2」の個数	2	3				4	3		
「1」の個数	0	0				0	2		
「-」の個数	2	0				2	0		

「-」は評価不能。

※は、評価不能を除く全項目の評定が「4」であった場合を 100%とした際の達成割合